

韓国における孝

—廣池千九郎の孝思想を中心に(1)—

廣池千九郎研究室

客員研究員 金聖哲

要旨

最近、韓国社会の全般にわたって現われた道徳的な問題は国家的危機をもたらしている。この問題の根源は、家族中心の「孝」の考え方にある。それ故このような道徳的危機を根本的に解決するためには「孝」の概念を再定義し、これによってその範囲を再設定しなければならない。廣池千九郎(1866～1938年)は「孝」について「人類の自己保存の本能に基づく孝道」に対する「自然の法則に基づく孝道」を「最高道徳的孝道」と規定している。また「孝」の対象について「自分の生存し発達するすべての原因〈天地の恩・君主の恩・聖人・賢人及び偉人の恩・師の恩・特に自己の精神を救済せる人の恩及び一般民衆の恩〉」に対し、これを「親として孝行を尽くす」と言明している。

本発表はこのような廣池における「孝」思想の観点から韓国における「孝」を考察することを目的とする。韓国人の家族中心の「孝」の傾向を明らかにし、このような原因を明確にするために朝鮮時代の「孝」概念の変遷過程を概観する一方、その過程で現れる「孝」の概念を再解釈し、発展的に継承することが論点の核心である。

まず韓国人の「孝」においては、父母重視・家族重視・親戚重視の態度が強く現れる。この家族中心の「孝」の傾向は、朝鮮時代(1392～1910年)以来、儒教の従属的階級倫理、閉鎖的な保守性、家族主義などがそのまま結びついた結果である。端的に言えば、朝鮮時代は「孝治時代」といえる。15世紀、4代王・世宗(セジョン、1397～1450年)は「孝」を国民倫理として広く奨励するため、「孝」に関する書籍を編纂すると同時に、孝行者を優遇する政策を施行した。16世紀、朝鮮朱子学を集大成した李滉(イ・ファン、1501～1570年)は「孝」を政治的・社会的規範に体系化した。彼は「仁」について人間が天地万物とともに自発的な「公心」を実践し統合するものであるとし、その根源について「孝」を挙げ、普遍的な人類愛としての「敬天愛人」の「孝」を提唱した。17世紀、いわゆる「礼学の時代」では「孝」を「礼」と結びつけ、国家を前提とした家父長的「孝」を政治理念として制度化した。朝鮮政府は中国から伝来した『朱子家礼』を普及させ、家庭と国家を一体化しようとしたが、それは「孝」が国家に対する服従の倫理として彼らの政治権力を維持するための手段であった。19世紀、外来のキリスト教と伝統の儒教が対立している中で、東学などの新宗教が登場し「孝」の対象を天主や天そして国家ではなく、人間そのものとして設定し平等思想を主張した。朝鮮政府は朱子学に反するものとして内部的にはキリスト教と新宗教を弾圧し、外部的には西欧文明の流入に対抗したが、圧倒的な軍事力を背景とした西欧列強の文明力の前に朝鮮は屈服した。このような朝鮮政府に対する民衆の不安が高まり、その結果、家族中心の「孝」が定着し、今日まで継続されているのである。

このことは朱子学を理念とした朝鮮が17世紀以来、「孝」を自律的な倫理ではなく、他律的な制度として理念化した結果であるが、これこそ本来の朱子学の反する考え方である。朱子学を信奉した世宗と李滉は家族、社会、国家、ひいては自然の倫理に発展する自律的な人類愛の基礎として「孝」を志向したからである。このような「孝」は廣池が提唱した普遍的な人類愛的「最高道徳的孝道」とも共通することとして、今日の韓国における新しい「孝」のあり方を提示するであろう。